『梁塵秘抄』法華経二十八品歌と釈教歌、経旨絵（その五）

植木朝子

現存する『梁塵秘抄』巻二法文歌二百二十首の中心をなすのは、『法華経』八巻二十八章を各章ごとに讃嘆した法華経二十八品歌百十四首である。前稿に引き続き(1)、各品ごとに、経旨絵や釈教歌とは異なる今様の性格、その流行歌謡としての面白さを考えていきたい。紙幅の関係により、本稿では安楽行品から寿量品までを取り上げることとする。

一、安楽行品

『法華経』安楽行品において、釈迦は文殊に対し、後の世で『法華経』を説く際の心得をこまかく述べ、以下のような譬え話をした。

転輪聖王（世界を統一支配する理想的な帝王）が諸国を討伐する時、戦功のある部下に種々の褒美を与えるが、髻の中の珠だけはみだりに与えることはない。釈迦も人々に諸経を説いて喜ばせたが、今まで『法華経』だけは説かな

かった。しかし、王が大功ある者に珠を与えるように、今、この最上のもの＝『法華経』を与えるのである。

この譬え話は法華七喩のうちの一つで、髻中明珠、髻珠などと言われる。

安楽行品を歌った今様は次の三首である。

輪王頭（かしら）に光あり　久しく隠して人知らず　法華経一度も聴く人は　頭（かうべ）の珠をぞ手に得たる（一二二二）(2)

法華経読誦する人は　天諸童子具足せり　遊び歩くに畏れなし　師子や王の如くなり（一二三）

妙法勤むる験には　昔まだ見ぬ夢ぞ見る　それより生死の眠り覚め　覚悟の月をぞもてあそぶ（一二四）

一二二番歌は、髻中明珠の譬喩を歌ったものである。髻の中の珠は、諸経の中で最上である『法華経』の譬えであり、転輪聖王が、最大の戦功者にのみ、髻中の珠を与えるように、釈迦は、今日、はじめて『法華経』を説く、と語られる。経の中の比喩譚では、当然ながら、転輪聖王＝釈迦、すなわち珠を与える側が主体となっているが、今様は『法華経』を聴く人の側に立って、聴聞者が珠を手に入れると歌う。鈴木治子が、「経を讃えるのではなく、聴聞に集った人々の受ける功徳に主題が移っている」(3)と指摘する通りであり、二句目の一般的な「人」は知らない珠を、三句目の『法華経』を一度でも聴いた「人」は手にすることができる、と仏の側ではなく人の側に立って一首を構成している。

一二三番歌・一二四番歌は、それぞれ安楽行品の偈「読是経者……天諸童子　以為給使……遊行無畏　如師子王」(4)（この経を読まん者は……天の諸の童子はもって給使をなさん。……遊行するに畏れ無きこと　師子王の如く）、「若於夢中　但見妙事」（若しくは夢の中においても　但、妙なる事を見んのみ）を典拠としている。一二三番

歌は、『法華経』を読誦する人に、天の諸々の護法童子が常にその身に従うことを歌い、諸国を巡り歩くのにも何の怖れもないことは百獣の王たる獅子のようである、とする。一二四番歌は、『法華経』の教えを行なった効験には、『法華経』を知る以前には見たことのないすばらしい夢を見ると歌う。夢の具体的な内容は、経によれば、釈迦の説く最高の教えに触れ、仏の位に達するとの予言を得て、山林での修行によって悟りを得、その教えを説いて無量の人々を救い、その後に入滅する、という夢である。このように、経に典拠箇所が見出せる一二四番歌前半二句に対して、後半二句には、対応する経本文がない。生死の眠り、すなわち、生死流転の迷いから覚め、悟りの境地を楽しむ、と歌う。「覚悟の月」は澄みきった悟りの境地を月に譬えたものであるが、菅野扶美は、「月をもてあそぶ」という表現が和歌と重なることを指摘し、寛治八年（一〇九四）八月十五夜、鳥羽殿における歌会に「玩池上月」題のあることに注目、「法文歌の「覚悟の月を玩ぶ」も、こうした和歌のはやりを受けての表現か」とする(5)。さらに、『散木奇歌集』に「翫明月」題が二例（四八九・四九七）、「翫月」題が二例（四八五・五〇六）見えることや、『山家集』に「翫月」題が一例（三八一）、『西行家集』に「老人翫月」題が一例（二六〇）見えること、「泉辺翫月」題が『頼政集』一六六番歌、『重家集』五六六番歌、『教長集』三一二番歌に見えること(6)を踏まえると、今様と関わりの深い歌人たちの間で、「月を玩ぶ」という歌題がよく取り上げられていることが知られ、菅野注釈を積極的に支持したい。

安楽行品の三首の今様は、それぞれ、『法華経』を「聴く」人、「読誦する」人、「勤むる」人を主語にしており、わずか三首ではあるが、経を授けられる者から教えを実践する者へ、段階が進むような形で配置されていると考えられる。

安楽行品の経旨絵においては、髻中明珠の譬え話がしばしば取り上げられる。談山神社蔵「法華曼陀羅」（文治三年〈一一八七〉頃）(7)には、宝塔の右下から上に向かって、楯を並べての戦闘場面、戦功ある者へ恩賞を与える場面、

特に功労のあった者に髻中の珠を取り出して与える場面が描かれる。その他に、『法華経』を弘めるために行うべき修行（安楽行）を、読経する僧、誦経する僧の姿で描いている。立本寺蔵「妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅図」（十三世紀中頃）(8)も、髻中明珠喩を描き、談山神社蔵本と同様、戦闘場面、恩賞を与える場面、髻中の珠を与える場面の三場面構成になっている。髻中明珠喩を描くものには他に、延暦寺蔵「紺紙銀字法華経」（伝智証大師筆）巻五見返（平安時代前期）、延暦寺蔵「紺紙金銀交書法華経」（伝慈覚大師筆）巻五見返（平安時代）、伝来不詳・本興寺蔵八巻本「紺紙金字法華経」巻五見返（平安時代）、伝来不詳・個人蔵「紙本墨書法華経」巻六見返（平安時代）などがある。鎌倉時代に下るが、長谷寺蔵「紙本墨書法華経」安楽行品見返上方には、雲上に騎獅文殊（経の中では、文殊菩薩が質問者の役割を果たしている）が描かれており、ひざまづいて合掌する善財童子と、獅子の手綱をとる優塡王を伴っている。文殊の前には、礼拝する大衆の姿が見える。その下方には、明珠を手にした転輪聖王が、特に功労のあった者にそれを与えようとしている場面が描かれる(9)。

一幅に一品または二品を描く本法寺蔵「法華経曼荼羅図」（嘉暦元年〈一三二六〉〜三年頃）(10)は、第十三幅が勧持品と安楽行品で、下方が安楽行品にあたる。左方に浴場と入浴する人々、窓から女性の姿がのぞく遊郭の様子が描かれ、右方の山中には相撲をとる人、滝に打たれる人、座禅する人、乞食する僧が見える。左下隅には、魚をとる人、鹿を狩る人、兎を捕らえ、肉を焼いて食する人の姿が描かれる。入浴する人、滝に打たれる人、座禅する人、乞食する僧は、偈の「於清浄地　而施牀座　以油塗身　澡浴塵穢　著新浄衣　内外俱浄　安処法座　随問為説」（清浄の地において　牀座を施し　油をもって身に塗り　塵穢（ちりけがれ）を澡浴（あら）い　新浄の衣を著て　内外ともに浄くし　法座に安処して　問に随ってために説け）と対応し、『法華経』を弘める者が身を清めて修行する様子を示している。遊郭や相撲、狩猟・漁労に従事する人、肉食する人は、偈の「亦莫親近　屠児魁膾　畋狩漁捕　為利殺害　販肉自活　衒売女色

如是之人　皆勿親近　凶険相撲　種種嬉戯　諸淫女等　尽勿親近」（亦　屠児と魁膾と　畋狩し漁捕して　利のために殺害するものとに　親近するなかれ　肉を販って自活し　女色を衒売る　かくの如きの人に　皆、親近すること勿れ　凶険の相撲と　種種の嬉戯と　諸の淫女等とに　尽く親近すること勿れ）に対応し、修行者が近づいてはならないものを表す。これらの図の間には髻中明珠喩が挟み込まれ、合戦場面と論功行賞の場面が描かれている。本興寺蔵「法華経曼荼羅図」（建武二年〈一三三五〉）[11]は、第三幅の一部が安楽行品の図である。この第三幅は三分の二弱が提婆品の図で占められ、他に、勧持品、涌出品、寿量品、分別功徳品、随喜功徳品も含まれる。安楽行品の図として描かれるのは、転輪聖王が、特に大きな戦功のあった者に明珠を与える場面である。

巻末に長寛二年（一一六四）九月と年記がある厳島神社蔵「平家納経」安楽行品[12]の表紙には、金の獅子が描かれ、たてがみや尾、足の一部および獅子が吐く雲気には銀砂子が用いられている。金泥で「遊行無畏」「如師子」の七文字が散らし書きされている。これは一二三番今様の典拠となっている偈の一部である。見返には金色の蓮台に銀の円が描かれており、その円の中には、釈迦の種子（仏・菩薩らの諸尊を表す悉曇文字）が記されている。さらにその種子からは十七条の金の光線が放射されている。これは、安楽行品の偈「又見諸仏　身相金色　放無量光　照於一切」（又　諸仏は身相、金色にして　無量の光を放ちて　一切を照らすを見ん）を表したものとされている。

安楽行品を題とした和歌の早い例として、

つとむるもそれもつとめじしかりとてひとりおもふも思ひがほなり　『長能集』[13]

定めなき世も何ならず法を思ふ心のうちし動きなければ　（『発心和歌集』）

世をそむくくせも心もうしなひて誓ひて末の法は広めん　（『公任集』）

名をあげてほめもそしらじ法をただ多くもとかじ少なくもなし　（『赤染衛門集』）

てふとなる人の夢だにあるものを鶴の林のをりまでやみし　（『入道右大臣（頼宗）集』）

といったものがあるが、後の世において『法華経』を説く時の心得について詠むものが多い。選子内親王の歌は、偈の「在於閑処　修摂其心　安住不動　如須弥山」（閑かなる処に在りて　その心を摂（おさ）むることを修（なら）い　安住して動ぜざること　須弥山の如くせよ）を意識しているもの、赤染衛門の歌は経文の「亦不称名。説其過悪。亦不称名。讃嘆其美。」（また、名を称（あ）げてその過悪を説かざれ。また、名を称げてその美を讃嘆（よきこと）せざれ。）や、「於一切衆生。平等説法。以順法故。不多不少。乃至深愛法者。亦不為多説。」（一切衆生において、平等に法を説け。法に順ずるをもっての故に、多くもせず、少くもせず、乃至、深く法を愛するものにも亦、ために多く説かざれ。）を引いているものであろう。頼宗歌は、一二四番今様が典拠とする偈の一句「若於夢中　但見妙事」（若しくは夢の中においても　但、妙なる事を見んのみ）からの連想で詠まれたものと思われるが、『荘子』に見える胡蝶の夢の故事を取り合わせて、釈迦の鶴林入滅を取り上げている。

さて、「夢」は和歌に馴染みやすい言葉であるためか、この後も、「若於夢中　但見妙事」を意識した歌は多い。

この法はうつつのみかは春の夜の夢にもたえぬことをこそ見れ

この法をたもつ人、うつつにたのしみあるのみならず、夢のうちにもたへなることをのみ見るといへるなり　（『田多民治集』）

夏の夜のみじかくむすぶ夢なれど妙なることを見ればたのもし　（範光『正治後度百首』）

うつつだにうつつともなき世の中に夢にも夢のさめにけるかな　（『寂蓮法師集』）

さまざまに妙なる花ぞちりまがふ法をたもてる春の夜の夢　（『長秋詠藻』）

あさましや恋しき影をおもはずは夢にも見まし有明の月　（『壬二集』）

さとり得てしばしまどろむ短夜の夢路もたえに月は見えけり　（『壬二集』）

夢のうちにとなへておもふ仏こそまことにさとるしるべなりけれ　（『為家集』）

安楽行品の結びの偈の中には、「常有是好夢　又夢作国王」（常にこの好き夢あらん　又夢らく国王と作って）の文言もあり、この箇所から「夢」を取り上げた和歌もある。

思ふべしわがうつつこそかなしけれ御法のやどに見る夢ぞそれ　（『拾玉集』常有是好夢）

御法ゆゑゆめになりにしすべらぎは覚むるうつつも又夢のほど　（『拾玉集』又夢作国王）

経旨絵にしばしば取り上げられ、一二二番今様にも歌われた髻中明珠喩は、早く『万葉集』に見られ、注目される。

いなだきにきすめる玉は二つなしかにもかくにも君がまにまに　（『万葉集』巻三・四一二・市原王）

ここでは、大事なものを、転輪聖王の「いなだき」（頭頂）に秘蔵してある玉に譬えており、それを「どのようにでもあなたのお好きなように」と言っている。新編全集頭注は、「秘蔵の娘を若い同僚などに娶ってもらえたら、と頼む内容か」とし、市原王が、天平十一年（七三九）頃から皇后宮職写経所に勤務し、その後身の金光明寺写経所の長

官にもなった人で、仏典に明るかったことを指摘している(14)。また、『赤染衛門集』には、次のようなやりとりが見える。

八講する寺にて　　大江為基

おぼつかな君しるらめや足曳の山下水のむすぶ心を

返し

けふ聞くを衣のうらのたまにしてたちはなるをも香をば尋ねん

又、為基

むかしをもかけて忘れぬ物なればたもつは玉のかずやまさらん

返し

数まさるたまとはかけじいただきのひとつの玉もわろきものかは

法華八講にちなんで、為基の戯れに対し、五百弟子品の衣裏繋珠の譬喩と髻中明珠の譬喩を珠の連想で持ち出していなす形をとっている。『万葉集』の例も、『赤染衛門集』の例も、経意を詠むことを目的とした釈教歌ではないが、『法華経』のよく知られた譬喩が日常的に用いられた例として興味深い。

しかし、平安期の釈教歌には髻中明珠喩はあまり詠まれず、今様に近い時代の例としては次のようなものが見られる程度である。

もとゆひの中なる法のたまさかにとかぬかぎりは知る人ぞなき　（京極前関白家肥後『続後撰集』）

その珠をむすびこめたるもとゆひもとくべきほどのありけるものを　（『忠度集』）

下った例も少なく、

時しあればわがもとゆひをとく玉の光をそへてふる霰かな　（『尊円親王詠法華経百首』）

むすびおくわがもとゆひの霜とけて光をみせよ露の白玉　（有光『為世十三回忌和歌』）

などが見られるものの、これらは、玉から、霰や霜、露へ連想を展開させる言語遊戯的な色彩が濃い。なお、鈴木治子は、和歌において、経の「髻」が「もとゆひ」「いただき」と詠まれているのに対し、今様は「かしら」「かうべ」と歌っていることに注目し、「歌謡的翻案」と指摘している(15)。

一二三番今様や「平家納経」に見られた獅子については、その荒々しさからか、和歌に詠まれた例は管見には入らない。安楽行品の和歌の題としては、他にa「願成仏道」、b「深入禅定　見十方仏」、c「住忍辱地」などがある。

aよそになど仏の道をたづぬらんわが心こそしるべなりけれ　（忠通『詞花集』）

いかでわれ心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさむ　（顕輔『詞花集』）

bふかき山に心の月し澄みぬればかがみによものさとりをぞ見る　（『聞書集』）

しづかなるいほりをしめて入りぬれば一かたならぬ光をぞ見る　（『長秋詠藻』）

cみちのくのしのぶもぢずりしのびつつ色には出でて乱れもぞする

初心始行の菩薩、よく違順をしのびて心をみだるべからざる事をいふなり　（『法門百首』恋）

安楽行品の経旨絵は髻中明珠喩の比重が大きく、和歌は「夢」の比重が大きいという凡その傾向が指摘できるように思われるが、安楽行品の今様は三首のみと少ないため、一定の傾向を導き出すことは難しい。しかし、先にも触れたように、『法華経』を「聴く」人、「読誦する」人、「勤むる」人と、主語を振り分けて、それぞれが得られるものを歌うという段階を追った配列になっている点は、書物としての『梁塵秘抄』の工夫と言えるのではないだろうか。

二、涌　出　品

涌出品で説かれる内容は以下の通り。

他方国土からやって来た諸菩薩は、仏の滅後は娑婆世界で『法華経』を護持しようと申し出たが、釈迦は、娑婆にも多くの菩薩がおり、自分の滅後も心配はない、と答えた。その時、地中から無量千万億の菩薩が涌出して仏を礼拝した。弥勒菩薩の質問に対して、釈迦はこれらの菩薩はみな自分が過去に教化した者だと答えた。そこで弥勒は、仏が出家し成道してから四十余年にしかならないのに、その短期間にどうしてそんなことができたのか、と疑問を呈した。

涌出品を歌った今様は次の二首である。

釈迦の御法のそのかみは　さまざま見知らぬ人ぞある　地より涌きつる菩薩たち　みなこれ金（かね）の色なりき

（一二五）

法華経このたび弘めむと　仏に申せど許されず　地より出でたる菩薩たち　その数六万恒沙なり（一二六）

いずれも、多くの菩薩が地中から涌き出す場面を切り取っており、一二五番歌は菩薩たちの身体の色、一二六番歌は菩薩の数の多さに注目している。

涌出品の経旨絵においては、多くの菩薩が地から涌き出す場面がしばしば取り上げられる。談山神社蔵「法華曼陀羅」には、釈迦の周りに涌出した多くの菩薩が座している様子が描かれる。立本寺蔵「妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅図」の場合、宝塔の周りに涌出した菩薩たちは、首より下が土に埋まった状態で描かれている。土中からの菩薩涌出は視覚的印象の強いものであり、絵画化されるにふさわしい場面と言えよう。涌出の菩薩を描くものには他に、延暦寺蔵「紺紙銀字法華経」（伝智証大師筆）巻五見返、伝来不詳・本興寺蔵十巻本「紺紙金字法華経」巻五（平安時代）、伝来不詳・本興寺蔵八巻本「紺紙金字法華経」巻五見返などがある。菩薩涌出の場面よりは少ないものの、涌出品の図柄として散見するのは、老人と若者の組み合わせである。これは、釈迦が成道してからわずか四十年ほどの間に、なぜこのように多くの求法者たちを教化し得たのかという疑問を譬えた話を踏まえている。その譬えとは、釈迦が多くの求法者たちを短期間で教化し得たのは百歳の老人が二十五歳の若者を父と呼ぶようなもので、信じがたい事柄だというものである。延暦寺蔵「紺紙銀字法華経」巻五見返、伝来不詳・本興寺蔵八巻本「紺紙金字法華経」巻五見返は、菩薩涌出の場面の他に、若い父と老いた子を描いている。

本法寺蔵「法華経曼荼羅図」は、第十四幅が涌出品と寿量品で、右側が涌出品の図柄になっている。上方に、宝塔

下の二仏並座を描き、その下に無量の菩薩が土中から涌出するところ（半身は土中にある）を描く。その下に、老人と若者が小さく描かれ、「父小而子老」[16]の譬喩を示している。本興寺蔵「法華経曼荼羅図」は、第三幅の一部が涌出品で、半身は土に埋まったままの菩薩たちの姿と老人若者が連れ立つ姿が描かれる。

「平家納経」涌出品の見返には、右手に剣、左手に水瓶を持つ裳唐衣姿の女性が描かれる。この女性については、持物から『法華経』の持経者を守護する十羅刹女のうち黒歯の姿を描いたものとされている。さらに、十二世紀後半以降、黒歯は胎蔵界大日如来の化身とされ、同時に厳島社の祭神・伊都岐島神の本地仏も観音ないし胎蔵界大日と語られるようになることに着目し、本図に描かれる黒歯が胎蔵界大日を仲立ちにして伊都岐島神を象徴的に表したものと解する説もあり[17]、経旨からは離れた展開ながら、興味深い。

永治元年（一一四一）頃に完成した「久能寺経」涌出品の見返には、銀泥で蓮池が表現されている。蓮池は浄土の象徴としてしばしば描かれるものではあるが、涌出品の偈で、涌出の菩薩たちがよく菩薩の道を学び、世間の法に染まらなかったことを「如蓮華在水」と譬えているので、それを意識したものであろう[18]。

涌出品をテーマにした和歌は、地から涌き出た多くの菩薩たちの様子を詠むよりも、むしろ、父小而子老の譬えを詠む例の方が多い。

たらちねの親よりこそは老いにけり年あらがひを人もしつべし　（『公任集』）

いかでかは子よりも親の若からん老いては若くなるにやあるらん　（『赤染衛門集』）

たらちねは黒髪ながらいかなればこの眉白き人となるらん　（永縁『金葉集』）

たらちねの親のよはひはさかりにてこはいかにして老いにけるぞも　（『重家集』）

たらちねをわかのうらわと見しままや子はまた老いの波をかけける　（『拾玉集』）

うちちがふ親子ながらの姿こそ昔をさとるはしと成りけれ　（『拾玉集』）

如何して初音は若き鶯の古き野山の春を告げけん　（『拾遺愚草』）

これらの和歌はほとんど、経の譬え話をそのまま受けているが、『拾遺愚草』の例は、若者（釈迦）を若い鶯に、老人（地から涌き出た菩薩たち）を古き野山にうつして、新たな譬えを展開させている。

涌出の菩薩を詠む和歌として早い例には、次のようなものがある。

ほとりなき仏のうみをわたればやしたつくよなる人のわきいづる　（『長能集』）

さまざまにあらはしてこそめでたけれ土に仏の種やありけん

仏をほめたてまつらむとて、地よりさまざま菩薩わき出でたまひしなり　（『田多民治集』）

これらは、今様と同様、地から涌き出た菩薩たちを驚きをもって捉えているが、涌出の菩薩を詠む和歌においては次に掲出するごとく、しばしば、菩薩たちの内面の汚れのなさに焦点を当てている。これらは、涌出品の偈「善学菩薩道　不染世間法　如蓮華在水　従地而涌出」（善く菩薩の道を学びて　世間の法に染まらざること　蓮華の水に在るが如し　地より涌出して）を引いている場合が多い。菩薩の内面に注目する方向性は、菩薩出現の姿の鮮やかさを驚きをもって描く今様とはやや異なっている。

いさぎよき人の道にも入りぬれば六つの塵にもけがれざりけり　（『発心和歌集』）

涌出　不染世間法

世の中のにごりになにかけがるべき御法の水にすすぐ心は

地涌の菩薩のひさしく法性の土に住して、よく菩薩の道を行ぜる事をとく文なり　（『法門百首』述懐）

涌出品　如蓮華在水

水の面にいづる蓮の色はみなこの世のほかのものとこそみれ

地涌の菩薩の、くらゐふかくして煩悩にけがされぬことを、はなにたとへたり、地涌は久遠の弟子なれば、この世のほかとはいふにや　（『法門百首』夏）

池水の底よりいづる蓮葉のいかでにごりにしまずなりけん　（俊成『続千載集』）

なお、『拾玉集』には「我常遊諸国」を題とした次のような詠歌があり、地涌の菩薩をいまだかつて見たことがないという他方国土の諸菩薩によりそった表現がみられ、「さまざま見知らぬ人ぞある」という一二五番今様と通う面があろう。

いづくにも思ひぞよらぬ木のもとのしたよりたちし花の白波

庭もせにかかる光はまたぞ見ぬ遊び残せる国はなけれど

涌出品の今様は、菩薩涌出を、身体の色や数の多さに注目して鮮やかなイメージで歌っており、経旨絵が描く場面

と重なっている。和歌が取り上げる菩薩の心には触れず、また、父小而子老の譬えも取り上げない。劇的で鮮やかな場面に注目する涌出品の今様は、釈迦の霊鷲山説法に付随する奇瑞を歌う序品の今様や、宝塔出現をきらびやかに歌う宝塔品の今様と共通していよう。

三、寿　量　品

寿量品で、諸菩薩の請いを受けた釈迦は、次のように答える。世間では、釈迦は王宮を抜け出して、伽耶の町の近くで悟りを開いたと思っている。しかし実は、釈迦が成仏したのは五百塵点劫よりもはるかに遠い過去のことであり、それ以来常に娑婆世界その他にあって、説法教化しているのである。釈迦の寿命は無量であり、常在不滅なのだが、釈迦がいつも目の前にいると思うと、人はつい油断して修行を怠ってしまうため、渇仰の心を起こさせる方便として、釈迦はまれにしか世に出ない、とか、やがて入滅してしまうなどと説いているのである。

寿量品を歌った今様は次の三首である。

法華経八巻は一部なり　二十八品その中に　あの読まれ給ふ説かれ給ふ　寿量品ばかりあはれに尊きものはなし（一二七）

仏は霊山浄土にて　浄土も変へず身も変へず　始めも遠く終りなし　されども皆これ法華なり（一二八）

娑羅林に立つ煙　上ると見しは空目なり　釈迦は常にましまして　霊鷲山にて法ぞ説く（一二九）

天台教学では、寿量品を法華経後半の要として重視し、『法華経』をテーマにした和歌においては、寿量品を詠む歌は他品を圧倒する数である。しかし、今様は量的には三首しかなく、提婆品の十首、方便品の九首、法師品の七首などに比して少ない。釈迦の常在不滅を説く寿量品よりも、釈迦の阿私仙給仕や龍女成仏（提婆品）、童子の戯れ遊び（方便品）、普賢菩薩の出現と摩頂（法師品）など、物語性を持っていたり、動的で鮮明な印象の逸話を含んでいたりする品の方が、今様には取り上げられやすかったものであろうか。それでも、一二七番歌は、『法華経』の中でも寿量品ほど尊いものはないと歌っており、寿量品を重視する姿勢が見える。『法華経』八巻中の一品を取り出して提示する今様には、他に次の一首がある。

法華経八巻がその中に　方便品こそ頼まるれ　若有聞法者　無一不成仏と説いたれば

（法華経二十八品歌・方便品・七〇）

一二八番歌は、釈迦が常に霊鷲山にいて、浄土も仏身も不変であること、仏の寿命が無量であることを歌い、浄土も仏身も『法華経』と一体であるとする。

一二九番歌は、釈迦が娑羅林で入滅し荼毘にふされて立つ煙が上ると見たのは凡夫の見間違いであって、釈迦は本当は不滅であり、常に霊鷲山で法を説いていることを歌っている。後半は、寿量品の重要な偈の一節「常在霊鷲山」[19]に基づくが、前半には、『涅槃経』に説かれる釈迦の娑羅林での入滅を取り上げている。宇津木言行は、釈迦の娑羅林入滅と寿量品の「常在霊鷲山」を取り合わせた例として、金沢文庫蔵の「舎利講式」や貞慶の「舎利講式」を挙げ、講会の場からの文芸の広がりを説く[20]。重要な指摘として支持したい。

寿量品の経旨絵として描かれる場面は大きく二つあり、ひとつは釈迦の霊鷲山説法、もうひとつは良医の譬喩である。この譬喩譚は次のような物語である。良医が国外へ旅した時に子らが毒薬を飲んだ。帰ってきた父が良薬を与えたところ、本心を失っていなかった子は薬を飲んで病から回復したが、本心を失った子は薬を服用しなかった。父はいったん国外に出て、「父は死んだ」と伝えさせる。子は悲しみの余り本心を取り戻し、父の残していった薬を飲んだので、毒は消えた。その時、父が帰国し、子らは父と会うことができた。釈迦が入滅するというのは、良医が子に自分の死を伝えさせたのと同じく、方便に過ぎないという譬えになっている。

談山神社蔵「法華曼陀羅」には、父から良薬の壺を与えられる童子の姿、父の残した薬に駆け寄る童子の姿、良薬を服用する男の姿が描かれる。立本寺蔵「妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅図」には、建物の中で病に苦しみ嘔吐する男の姿と庭で薬を搗き合わせている二人の医師の姿が描かれる。本法寺蔵「法華経曼荼羅図」は、第十四幅が涌出品と寿量品で、左側が涌出品の図柄になっている。上方に、霊鷲山で法を説く釈迦を描き、その下に、火で焼かれている娑婆世界、持経者のもとに影向して法を説く釈迦の姿を描く。一二八番今様が歌う浄土の不変と釈迦の寿命の長久なることを示しているものであろう。さらにその下方には良医の譬喩が描かれている。病臥する男と介抱する人々、薬を調合する医師の図の他、父が子のいる家とは別の邸宅に一時身を隠す様子や、他国から馬に乗って帰ってくる様子が描かれている。本興寺蔵「法華経曼荼羅図」は、第三幅の一部が寿量品で、良医の譬喩として、邸宅内で病臥する子と薬を与えようとする父の姿、馬に乗った父の旅姿が描かれる。平安時代に作られたいくつかの経の見返絵を確認しておくと、伝来不詳・個人蔵「紙本墨書法華経」巻六に釈迦説法、厳島神社蔵「紺紙金字法華経」（嘉応二年〈一一七〇〉～承安二年〈一一七二〉）巻六に釈迦説法と良医の譬え（嘔吐する男・病臥する男・薬を調合する医師）、平泉中尊寺伝来「紺紙金字法華経」（基衡経。保延六年〈一一四〇〉）巻六に釈迦説法と良医の譬え（嘔吐する男とそれを

介抱する童子・薬を調合する老医師）、延暦寺蔵「紺紙金銀交書法華経」（伝慈覚大師筆）巻六に良医の譬え（薬を調合する医師）、伝来不詳・本興寺蔵十巻本「紺紙金字法華経」巻六に釈迦説法と良医の譬え（嘔吐する男・薬を調合する医師）、伝来不詳・本興寺蔵八巻本「紺紙金字法華経」巻六に釈迦説法が、それぞれ描かれている。「平家納経」寿量品の見返には、霞と遠山、木々の茂る山岳風景が描かれ、山に囲まれるようにして、天人風の人物が描かれる。脇息に肱をつき、立て膝でくつろぐ中央の人物は釈迦を象徴すると考えられている。その人物を中心に、薬を捧げるふたりの童子、合掌する三人、横たわる一人の人物の姿が描かれている。横たわる人物は、あるいは毒を飲んだために伏せている者であろうか。薬を捧げ持つ童子と共に、良医の譬喩を絵画化したものと見られる。釈迦説法が寿量品に限定されない図柄であるのに対し、良医の譬喩は、寿量品独特の図柄であり、薬を調合する様子、毒に苦しむ様子、薬を飲む様子など、動きがあって絵画化されやすかったものと思われる。

寿量品をテーマにした和歌は、そのほとんどが、「常在霊鷲山」を歌い、釈迦をしばしば澄んだ月に譬えている。一例を挙げると次の通り。

鷲の山へだつる雲やふかからん常にすむなる月を見ぬかな　（康資王母『後拾遺集』）

世の中の人のこころのうき雲にそらがくれする有明の月　（登蓮法師『詞花集』）

月影の常にすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば　（国房『千載集』）

今ぞ知る心の空にすむ月は鷲のみやまのおなじ高嶺と　（俊恵『続古今集』）

出入ると人はみれどもよとともに鷲のみねなる月はのどけし　（『公任集』）

月かげは世をうきくもにかくれねど鷲のみねにはすむとこそ聞け　（『待賢門院堀河集』）

人目には世のうき雲にかくろへてなほすみわたる山の端の月
（『田多民治集』※『続後撰集』には道長詠として載る）

＊鷲の山つねにすむべきしるしにや鶴のはやしにかげかくしけん
（『教長集』）

世の中になほありあけのつきせずととけば心のやみぞ晴れぬる
（崇徳院『久安百首』）

月かげのいるさへ人のためなれば光みねどもたのまざらめや
（崇徳院『玉葉集』）

もち月のくまなきかげをみるからに鷲のみやまを思ひこそやれ
（範光『正治後度百首』）

＊ときはなる鶴の林のあやなくもたきぎつきぬと思ひけるかな
（『寂蓮法師集』）

＊今ぞ知る鶴の林は名のみして鷲のたかねにすめる月かげ
（『殷富門院大輔集』）

鷲の山月を入りぬと見る人はくらきにまよふ心なりけり
（『山家集』）

さとりえし心の月のあらはれて鷲のたかねにすむにぞありける
（『山家集』）

＊かりそめに夜半の煙とのぼりしや鷲のたかねにかへる白雲
（『長秋詠藻』）

末の世は雲のあるかにへだつとも照らさざらめや山の端の月
（『長秋詠藻』）

やみのよるもひるをもわかず鷲の山いつものどかに有明の月
（『拾玉集』）

うき世にはうれへの雲のしげければ人の心に月ぞかくるる
（『拾遺愚草』）

これらの例のうち＊を付したものは、一二九番今様と同じく、「常在霊鷲山」に、釈迦の鶴林入滅を取り合わせたもので、宇津木注釈が指摘するように、和讃・講式とこれらの和歌、そして今様法文歌は相互に影響し合っていると言えよう。『法門百首』には、

寿量　心懐恋慕渇仰於仏

わかれにしその俤の恋しきに夢にも見えよ山の端の月

もとのしづくとなりぬる人の、あかぬわかれをおもふに、なさけありしことのはこころにとどまりて、いよいよたもとの露をそへ、あざやかなりしすがたはまなこにうかびて、ねざめのともとならずやはある、まして如来在世のむかしを思ひやれば、三十二相のすがたみるものいとふことなく、四弁八音のみのりきくともあくべからず、しかるに機縁たきぎつきて、双林のけぶりとのぼらせ給ひにしかば、たれの人か恋慕渇仰の思ひにしづまざらん、いま末法にながれをうけて、とほく妙道にうるふともがらなりとも、慈悲のすがたに心をかけて、ねられぬいをもなげかば、生死の夢のうちになどか満月の尊容をみたてまつらざらむ、かるがゆゑに文にいはく、一心欲見仏、不自惜身命、時我及衆僧、倶出霊鷲山といへるは、ひとへに中天雲井のみにあらじ、機感ときいたりなば、わがこころ中道のやまにもあらはれたまひなむ

とあって、和歌の中には現れないものの、自注の中で「双林のけぶりとのぼらせ給ひにしかば」と鶴林入滅に触れている。なお、俊成詠の「かりそめに煙とのぼりしや」は、一二九番今様の「煙上ると見しは空目なり」と表現が特に類似しており、注目される。

和歌の中には、康資王母、登蓮、国房、忠通、西行、定家らの詠歌のように、雲が月を隠すことに譬えて人の心の闇に目を向けるものもあり、今様には取り上げられない不安や信仰の陰りにも触れられている。

常在不滅ということは、すなわち仏の寿命が無量であることと等しいが、特に、その仏の命の長久なることを意識

して、時間を詠み込んだ歌も散見する。

ちりひぢの数も知られぬ年月のつもれるほどは今ぞききつる　（『重家集』）
むかしはやさとりはれにし月影をこよひ深山を出でしとや見し　（『長秋詠藻』）
けふきけば光もふるき月かげをいづるはじめと思ひけるかな　（『二条院讃岐集』）
これぞまこと仏の道に入りしより得てし命はつくるものかは　（『拾玉集』）

「常在霊鷲山」を詠む和歌に比べると量的にはかなり少ないが、次のように、良医の譬えを詠んだものも見られる。

たらちねの薬をなめむかりそめのみことをきくはかなしかりけり　（『長能集』）
ありながら死ぬる気色は子のためにとめし薬をすかすなりけり　（『赤染衛門集』）
くるしくは我をこふとやこころみに死なぬ命を死ぬとつげけん　（『入道右大臣（頼宗）集』）

寿量　作是教已至他国

山ふかきこのもとごとにちぎりおきてあさたつ霧のあとの露けさ

やまひにしづめるこの、本心をうしなひてくすりを服せざるがために、われはほかの国へさりなむとす、とどめおくくすりを服すべしといひて、ちちのくすしわかるるなり、これは仏つねに世に住したまへしは、衆生いとふ心をなすべきがゆゑに、のりをとどめて滅し給ふなり、今如来滅後にあうて、わづかにこの法にあへり、機縁のあさきを思ひ、仏恩のふかきを思ふに、なみだとどめがたかるべし

風になやむまくずが原にあさ日影のどけきかたのたよりなりけり　（『法門百首』別）

げにぞさとるやまひにえたる薬よりしらぬしるしはあらはれにけり　（『拾玉集』）

（『拾玉集』）

以上、寿量品の今様は、経旨絵が多く描く良医の譬喩を取り上げず、寿量品のありがたさと常在霊鷲山の尊さを讃嘆する。時に和歌が、常在霊鷲山を信じ切れない人の心の迷いを詠むのに対し、今様は荼毘の煙と見るのも「空目」に過ぎないとして、仏への信頼を強調しているのである。

註

(1) 植木朝子「『梁塵秘抄』法華経二十八品歌と釈教歌、経旨絵（その一）」（『文化学年報』第六十一輯　二〇一二年三月）、「同（その二）」（『文化学年報』第六十五輯　二〇一六年三月）、「同（その三）」（『文化学年報』第六十六輯　二〇一七年三月）、「同（その四）」（『文化学年報』第六十七輯　二〇一八年三月）。

(2) 「梁塵秘抄注釈（第四回）」（『梁塵　研究と資料』第二十六号　二〇〇九年三月）の校訂本文により、一部表記を改めた。法華経二十八品歌（安楽行品・涌出品・寿量品）の引用は、以下同じ。

(3) 鈴木治子担当一二二番歌【考説】（註(2)「梁塵秘抄注釈（第四回）」）。

(4) 『法華経』安楽行品の本文および書下し文の引用は、岩波文庫『法華経』中（岩波書店　一九六四年）による。

(5) 菅野扶美担当一二四番歌【考説】（註(2)「梁塵秘抄注釈（第四回）」）。

(6) 歌番号は『新編国歌大観』による。

(7) 宮次男『金字宝塔曼陀羅』（吉川弘文館　一九七六年）を参照した。

(8) 註(7)書を参照した。両曼陀羅については、以下同じ。

(9) 以上の経見返絵については、倉田文作・田村芳朗監修『法華経の美術』（佼成出版社　一九八一年）を参照した。以下取り

上げる経見返絵についても同じ。

(10) 註(9)書および原口志津子『富山・本法寺蔵　法華経曼荼羅図の研究』（法蔵館　二〇一六年）を参照した。本曼荼羅図については、以下同じ。

(11) 註(9)書を参照した。本曼荼羅図については、以下同じ。

(12) 『厳島神社国宝展図録』（奈良国立博物館　二〇〇五年）を参照した。

(13) 和歌の引用は『新編国歌大観』により、一部表記を改めた。

(14) 小島憲之　木下正俊　東野治之　校注・訳　新編日本古典文学全集『萬葉集①』小学館　一九九四年による。

(15) 註(3)に同じ。

(16) 『法華経』涌出品の本文および書下し文の引用は、岩波文庫『法華経』中（岩波書店　一九六四年）による。

(17) 増記隆介『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版　二〇一五年。

(18) 梶谷亮治「久能寺経について―個人蔵本を中心に―」（『まぼろしの久能寺経に出会う平安古経展』奈良国立博物館　二〇一五年）は、涌出品見返絵が俊成の釈教歌「池水の底よりいづる蓮葉のいかでにごりにしまずなりけん」から着想を得ているのではないか、とする。この図柄は、俊成歌を介在させずとも、経本文から十分描けるものであろうが、俊成の和歌は「康治のころほひ」（一一四二～一一四四）に詠まれたもので、待賢門院（一一〇一～一一四五）の発願になるとされる久能寺経とは、時代的にも重なり興味深い。

(19) 『法華経』寿量品の本文および書下し文の引用は、岩波文庫『法華経』下（岩波書店　一九六七年）による。

(20) 宇津木言行担当一二九番歌【考説】（註(2)「梁塵秘抄注釈（第四回）」）。